

COSMOS集



どんどの火にあたる幸せほてる頬知らぬ人とも親しくなりぬ

蕾 映 ゆ 尾形 久子 群馬

秋陽なさきたまか前玉神社のとうろうをなでつつ読みぬ万葉の歌

あたたかき肌着二枚の年玉をあづけて思ふ会へざる姉を

葉間よりまろくさいろき蕾映ゆ寒のさなかのクリスマスローズ

わづかづつ異なる香にてあさなさなわれを誘ふ三種の水仙

いつよりか夫の「おーい」の増えきたり妻の名いづくに置き忘れしや

カンファレンス室 吉弘 藤枝 埼玉

どんどやきすたれて燃やせぬ松飾り芥として出す塩に清めて

人声と思へぬ音のまろやかさ歌会始めの朗詠に酔ふ

カタカナ語増えて戸惑ふことばかりカンファレンス室が会議室とは

木蓮のつぼみは全て天を向く俯くものは一つだになし

絶えしかと枯葉除けばその下に青みづみづと紫蘭の芽吹く

ピントは鳥に 人見 江 一 * 神奈川

「見つけたよ」君の指差す先に咲く節分草は白く儂い

白秋の享年とうに越してからゆるり始める歌を詠むこと

望遠のレンズを構え連写するピントは鳥に、AIサーボで

亡き父に夢で逢うようこの夜も寝る前に読む父の歌集を

玄関に妖怪アマビエ貼ってから三年経つがまだ剝がせない

水上 美季選

「あすなる集」特選

明日のあなた

多田 美慧子 * 宮城

ラジオよりざわざわと流れくるちあきなおみの「さとうきび畑」

震災の記憶を残す歌詠めずこの十二年は煮こごりのよう

「悲しみは充分だから放つていて」ちいさく開く啓翁桜

雪の原見ゆる茶房にひとり来て歌集を開くこの幸いや

つと来て白鶴鴿が尾を振り明日のあなたに逢いましたよと

心をノック

水野 須美子 * 宮城

クロッカスの黄色待ちわぶ庭隅に春への助走を見たき如月

冬枯れのわれの心をノックして蠟梅の香がやわらかに来る

ほのかなる蠟梅の香に足を止め春を覗きぬ光の中に

時をかけ煮たる大根ほろほると味わい尽す雪の夜なり

鈴木 竹志選

君との時間

富 永 恵美子*東京

中年期ふいに始まる傘の柄が折れてあなたへ飛んでいった日
セーターの毛玉くらのちよつとした嘘ふたつある雑談をした
読みすすむスピードやたらに遅い本つまりわたしに必要な本
あんかけのころみのような眠気きて肩から夢へと沈んでいった
産めないか産まないだったかゆつくりと忘れて君との時間を生きる

母の入所

折笠 瑞 枝*新潟

じゃんけんに勝った夫は今年また鬼を選んで豆ぶつけられる
書きためた二十余冊の日記帳さちんと括り母は入所す
入所した施設の窓を開け放ちかあさんと見るケヤキの枝刈り
スタッフの手作りというおみくじは小吉とあり母と慶ぶ
だれかさんを羨む気持ち溶けてゆけ時間をかけてシャンブーをする

寒九の水

四谷 範 富山

田尻池に早朝六十二羽あし白鳥が十時の今は一羽も見えず
デパートの用事をすませ見上ぐればスカットと晴れた大寒の空
恵方巻作るか買ふか迷ふなり「買へ」とささやく怠けのむしが
白黒のテレビドラマ「花の生涯」カラーで甦る 令和五年を生く
毎朝を飲む水なれど今朝の水ことさら甘し寒九の水ゆゑか

罨 づ くり

菊池 むつ江 長野

雪もよひの夜はうきうきと罨づくりかつての悪童老いて語れる
尻尾の毛罨にするためこつそりと厩にしのはげし夜もおそくに
馬方の目はぬすめども悪がきの気配さとりし馬のあはれさ
わら束に罨を結びて畦に立てひねもす見はる障子穴から
冬鳥のかかるとみるや雪のなかペンギンさながら分けつまるびつ

親芋、子芋

小森 鈴 子 岐阜

ウクライナの防寒支援にも回りしと知りて嬉しもわづかな寄付が
新聞はこの世の灯あかりと思ふなり事実まことに懸ける記者たちのゐて
ブルーシートと藁わらに覆はれ土中に眠りをりたる里芋掘りぬ
親芋より子芋を挽げばパキツといふ音はじけたり春立つ朝に

水上 比呂美選

薄桃色のブラウス

高橋 みどり*愛知

独り身のおんなが三人集まりて未婚みたりと死別と離別の「ひとり」
退職を静かに待っていたかかった我に見つかるカンニング生徒
困らせる恋をしている不器用な少女いつかのわたしのよう
人生で最後の離任の式のため薄桃色のブラウスを買う
退職ののちの四月の平日に訪ねてゆかん吉野の桜

白妙の豆腐 福本郁子*京都

鮭とばを炙ってお酒いただけば北海道の荒海うかぶ
雪国の旅より帰る大阪は春めく風に埃の上がる
食細るされど食べたいものはあり一口ようかん半分を食べ
「湯豆腐はぐらりとしたら火を止める」五月蠅い人と今宵も食事す
やわらかく栄養摂れる白妙の豆腐を食べるふたりに食べる

寒きびし 橋本武則*大阪

加齢性貧血ありてヘモグロビン低値が続く冬日温とし
チューリップ活けたる束に彩あふれ耀い春へ誘うごとし
寒きびしくクリスマスローズ咲き継げばしらじらとして粉雪の舞う
落葉して柿の実赤く残る空吾は籠りて雑炊を食べ
七草は朝餉の粥の具となりて冬の味覚を楽しうにする

雲のドラマ 佐藤咲子兵庫

容赦なく陽性ですと言はれたり八十六歳コロナにかかる
点滴の落つるを数ふうつらつら遠くに母の声したやうな
今日ひと日眺めて居よう病院の窓に広がる雲のドラマを
退院の迎への子らに「どなたさま」言つてみたくて雲に話せり
誰が歌ふ「おなかと背なかくつつくぞ」瘦せに瘦せたりコロナを病みて

新たな出発 石富洋子島根

五回目のワクチン接種終へてなほ新型コロナウイルスの足音消えず

小旅行気分支度整へる三泊四日の白内障手術
赤・黒の滲み広がりうごめきぬ白内障手術中見上げる先に
明日からガラスのレンズに映る絵を思ひ出とする新たな出発
雨の街肩を回して腕をもむタクシードライバーは赤信号に
松尾 祥子選

還暦の冬 江崎玲子*福岡

五十年もちますと言われ水晶体レンズを替えた還暦の冬
七福神現われたかと思うほど輝いて見ゆ炊きたてのご飯
二階より見下ろす庭の白梅にあまたの蕾見ゆる嬉しさ
アイスバーン白き路面は輝いて北国となる福岡の街
コロナ禍に柳川市民会館は四十九年の歴史を終えた

春 一番 小松省己佐賀

菜の花の咲く野の道をジョギングし春一番に帽子飛ばさる
パンジーにクリサンセムム開花して三寒四温の今日「雨水」なり
樹木葬のこぶしの蕾ふくらみてその下に眠るティムを偲べり
睦月尽ゆき降る夕べ蠟梅は仄か香りて花明りせり
収穫のパンペイユ、レモン、ハッサクは三和土に転びて甘き香りす

からゆきさん 垣野幸一*長崎

石炭の積み出し港と栄えたる口之津いまはイルカ群れなす
石炭の積み出し作業に従事した与論島民の長屋が遺る

口之津は悲しき港幾千のからゆきさんが売られゆきなき
サボテンにイルミネーション巻かれて大江の坂は御堂へつづく
天草の大江を訪うも天主堂の御堂の扉閉ざされいたり

雪 一 兔 川 越 三紀子*宮崎

六十年家族を守り耐え来しか隣家が遂に更地になる
建物も土台も全てなくなりて家の跡地に満ちる静寂
雪舞う日不意にメールの届きたり「雪です！熱燭！」友は予報士
「がんばった」と雪兔の写メ届きたり姉の体調まずまずらしい



狩野 一男選 「その二集」特選

怯 む 癖 浜 野 昌 子 北海道

寒波来て猛吹雪来るこんな日はひとり外を歩きたくなる
屋根の雪がサツと落ちるその音に猫と驚き窓にかけ寄る
挫けずに節制続け五キロ減るわたしにご褒美いちごのケーキ
再びを講師となりて就職し藤棚のある校舎を仰ぐ
今年こそ兎のやうに跳び越えよ「自分には無理」と怯む癖を

芽吹く前に切ろうと思う柿の木に今朝もつがいの鳩が来ている
草 餅 植 田 カズミ 鹿児島

友の姉ドクターストップを振り切りて五十年振りの帰郷果たせり
夢に見しふるさとに来て花見して「東京が我が家」と発ちたるひとよ
春来れば草餅をつく杵の音、「ヨイシヨ」の掛け声響いてゐたり
五番目の男孫の頬つべは餅のやうつまむとブクンと団子になれり
窓ガラスに影を映して揺るる花ハイビスカスは一日の花

五 割 増 し 千 葉 喜 恵*岩手

《食品も電気も値上がる日々となり我の暮しに（侵攻）の影
うつすらと初雪の朝野良猫の足跡伸びる馬屋の階段
たばしね 束稲山を眺めて休む月見坂西行、芭蕉は何を見しかな
プライバシー保護の眼科は名を呼ばず今日の私は85番
四十年勤めし我の五割増し首長三期の退職金は

ポ ト フ の 番 谷 川 恵 崎 玉

サブバッグからはみ出たる黒ダウンをぎううと抱く待合室に

静脈にすうんと沈みこむ針を伏せたまぶたで感じてをりぬ

三本目のスピッツに挿し替へたとき看護師の瞬きは増えたり
(骨盤を立てる)とかいふスツールを持ち込んでポトフの番をする
参道の甘味処の酒まんぢゅう ひとりチンしてはつくりと食む

閑 店 伊藤 弘 通*東京

日経の「私の履歴書」久びさにおもしろく読む村井邦彦

本郷の菊坂下の駄菓子屋のあさひ菓子店閉店したり

青空のまつ黒い点にすぎなかつたとんび近づき色あるを知る
スーパールのバックのマグロの切り落しご飯を付けければ立派な弁当
シャンシャンのニュースの影で目立たぬが見事に咲きぬ上野牡丹苑

声が枯れても 日山 七菜子*東京

はじめての鮭釣りだ 生きた餌をいただきますと叫びつつ刺す
鮭が跳ねて暴れて 落ちついて、いま楽にしてあげるから、ねえ
バケツにはみつしり鮭 数十の瞳が曇り空を見つめる

ひさしぶり、会えてうれしい 食卓の鮭からあげ喉に刺さった
日本酒が粘膜を焼く ねえわたし声が枯れてもあなたと話す

風間 博夫選

なかつたことに 清水 由美子*長野

「平均の余命は三年だそうです」さらりとそんなこと言わないで
夢だろう夢じゃないのか明日くれればなかつたことになりはしないか

空あおし眠れなくても夜は更けて悲歎の底にも朝おとずれる
押し寄せる日々の業務をひたすらにせせば誰もが減入る暇なし
久々の大見出しなり中国の人口減載す朝日の一面

袖をつかみて 山田 一 弥 岐阜 卓

調髪を終へたる客は喫煙し帰れば寒の窓あけ放つ

年末の夕べに吾の髪切りて妻はつぶやく「今年もおわり」
遠き日に拾ひし庭の揖斐石は雨に濡れぬて青みづみづし
瓶に挿すくれなゐの実の千両は緑き葉のうへ伸びやかに立つ
雪路凍てわれの足元すべりたり妻は支ふる袖をつかみて

楽しみは何 梅沢 佳子*静岡

この先は老犬なれば好きな物与えてよろしと獣医は語る
目も見えず耳も聞こえぬ老犬に尋ねてみたし楽しみは何
陽だまりに縫い物すれば飼ひ犬は時々われを伺い眠る
チョコレート色の毛なみもうすれきて老犬ラブはひねもす眠る
裸木にみの虫一つ住みついて動物病院今日も繁盛

じわと赤らむ 権田 陽子 静岡 岡

麻醉より覚醒すればまたひとつ部品欠けたる体となれり
病状の重きも軽きも四人部屋カーテン越しに思ひ飛びかふ
りつしゆんと言葉にすれば丹田の内なる埋み火じわと赤らむ
ペディキュアの代りに真赤なソックスをはきて踏み出す七十の春
凍て空にふるへミモザは春を待つ枝先にほのか黄色やどして

感度100パーセント 岩 館 澄 江*愛 知

めくるめく思い出の駅すつ飛ばし特快はゆく私をのせて
それ以外なにもいらなただ君の好きな音楽教えてほしい
たつぷりと休んだことで全身が感度100パーセントたのしい
いま横を自転車サツと通り過ぎお風呂上がりの匂いただよう
楽しみな気持ちと終わる悲しみが同時に迫る夕焼けの空

木畑 紀子選

ね ぎ 姫 新 敦 子 鳥 取

黒土も茶枯れの皮も脱ぎ捨てて白き肌はだのねぎ姫となる
ストーブを囲みて焼けた白ねぎを孫らほほばる歓声あがる
ばんと張る長き白ねぎ火の上でくの字に曲り「食べ頃ですよ」
演劇に居場所みつけれし弟は十九で挑みき(劇団四季に
「フレイルの予防するぞ」と土砂運びボランティアするおとうと元氣

「芭 蕉 布」 高 本 寿 子*広 島

薄雪の積もれる庭に太陽がじわりじんわり模様描きたり
狙いる排水坑のどん詰り「バック!」と言えど聞く耳持たず
亡き友が歌えとせがみし「芭蕉布」がラジオに流れ穏し如月
気丈夫な彼女は抗癌剤を止め仕舞い仕度せり残りの日々を

長男の婚礼早めて友は逝く着物一枚残さざりけり

巡 回 の 灯 細 木 圭 子 高 知

吾のどこにかほどの忍耐かくれるしか術後五時間脚うごかせず
滴々と二秒に一滴したたりてこれが今夜のわたしのご飯
点滴と仰臥で眠れぬ視野のなか巡回の灯のしのび入りきぬ
耐へたるをほめてもらひし言の葉を噛み締めかみしめ一夜を明かす
病むわれに力かしくるる人のあり病得しのち沁みておもほゆ

水 仙 匂 ふ 原 万 紀 長 崎

茹で上げし蓬のみどりがぐはしく冷凍室に春をストックす
さくら餅桃のカステラを先駆けに菓子舗はなやぐ雛の日近し
抜き残し畝にせり上がる大根の青首にふる春のぬか雨
たづさへし水仙の花の匂ふなり蒼天のけふは兄の納骨
風揚げの空に繋がるウクライナけふも戦火に泣く子らのゐる

お じ さ ん 化 小 森 田 よ り 子*熊 本

雪の中外出するなど言われても毛皮の付いたブーツはきたし
凍結の警報ききて着せやりぬ水道管にヒートテックを
雪道は白黒どっちも気をつけよホワイトアウトにブラックアイスバーン
わたくしの物より高い化粧水ならば息子の洗面台よ
段々とおじさん化するわたくしはジェンダーレスの波に乗るなり